【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	香川県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	高松市立屋島中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	６	６	６	２	２０	３９
生徒数	２２９	２３９	２１０	３	６８１	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

自ら学び，自ら考え，豊かな心を持った生徒の育成
－学習活動の質的改善と評価の一体化をめざして－

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

英　語　「生徒の英語学習を支える評価活動の在り方」
・基礎基本の定着をはかり，コミュニケーション能力を育てる。
（１年生)　３時間のうち２時間をティームティーチングで行う。
（2･3年生）全ての時間を等質なクラス分けによる少人数授業を行う

数　学　「一人一人の個性を生かす数学教育の在り方」
・計算力などの数学を学ぶ上での基礎的な力を定着させ，発展問題に挑戦させることにより問題解決能力を育てる。
（１年生）全ての時間をティームティーチングで行う。授業内容によっては生徒がコースを選択して少人数授業を行う。

理　科　「問題意識を高める学習活動の在り方」
・実験観察の基礎基本を円滑に習得させるため主従型のティームティーチングを行う。
（2･3年生）３時間のうち１時間をティームティーチングで行う。

選　択　自ら選択した教科でその教科に即した学び方を学ぶ。
（2･3年生）６学級を７グループに分けて授業を行う。

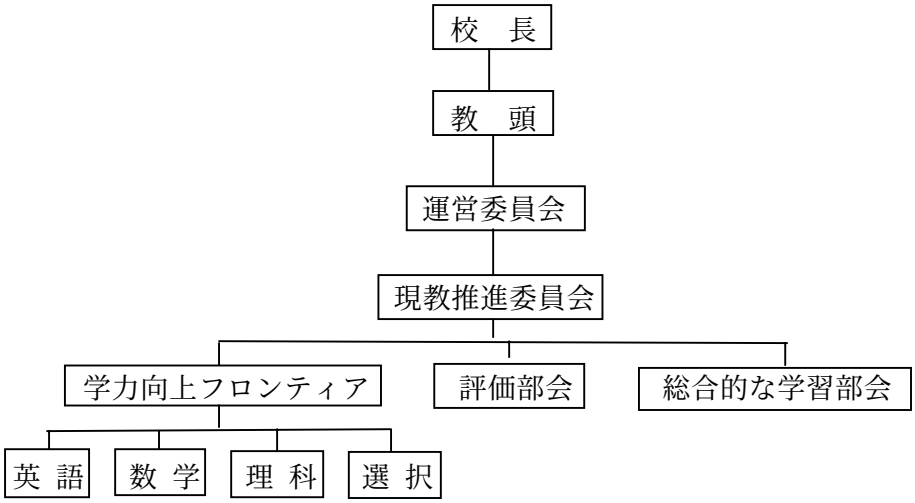
(2)　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 学習活動の質的改善と評価の一体化 ○　研究の見通し Ｔ･Ｔ，少人数の指導が生徒の学力を向上させる指導方法であると考え，さらに効果の上がるＴ･Ｔ，少人数授業の指導体制を工夫していく。また，評価を生徒にフィードバックすることで学力向上への意欲を喚起できると考え，学習活動と評価の一本化を図る。 ○　研究の内容・方法 内　容 ・主体的な学習活動を展開するための学習指導方法の質的改善の視点を検討する ・学習活動の多様化と広がりをめざした情報通信メディアの活用の利点を検討する。 方　法 ・学習活動の質的改善の視点を，次の①～④のように捉えて主体的な学習活動の具体的支援の在り方について研究・実践を行う。 ① 問題解決能力を育てる ② 情報活用の実践力を育てる ③ コミュニケーション能力を育てる ④ 「学び方」「ものの考え方」を学ぶ

平成16年度	○　テーマ 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 学習活動の質的改善と評価の一体化 ○　研究の見通し Ｔ･Ｔ，少人数の指導が生徒の学力を向上させる指導方法であると考え，さらに効果の上がるＴ･Ｔ，少人数授業の体制を工夫していく。また，評価を生徒にフィードバックすることで学力向上への意欲を喚起できると考え，学習活動と評価の一本化を図る。

平成16年度	○　研究の内容・方法 内 容 ・主体的な学習活動を展開するための学習指導方法の質的改善の視点を検討し，それに応じた学習活動を実践する。 ・学習活動の多様化と広がりをめざした情報通信メディアの活用の利点を日々の学習活動に取り入れる。 方 法 ・　学習活動の質的改善の視点を，次の①～④のように捉えて主体的な学習活動の具体的支援の在り方について研究・実践を行う。 ① 問題解決能力を育てる ② 情報活用の実践力を育てる ③ コミュニケーション能力を育てる ④ 「学び方」「ものの考え方」を学ぶ ・学習集団の構成の仕方を工夫改善し，より生徒の実態に即したものにするためには，どのような視点が大切か研究する。 ・情報通信メディアを活用したユニット学習（＝題材，単元などで呼ばれている指導内容のまとまり）を構成し，学習活動の多様化と広がりの利点についての研究，実践も行う。

(3)　研究推進体制



・各教科部会で指導方法や指導形態の研究授業を進めていく。年間３回程度の研究授業を行い，日々の実践へつなげられる研究を行う。
・T・T，少人数を行っていない教科についても学習活動の質的改善，評価について研究を進めるよう配慮する。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

１．生徒の学力向上を目指して研究していく中で，以下の視点で研究に取り組むことが主題に迫るために重要であると明らかになった。

＜教育目標＞

心身ともに健やかな生徒を育てる
(1) 自ら考え行動できる生徒
(2) 自他の人格を尊び，共に生きる生徒

＜新学習指導要領＞

「ゆとりの中で生きる力をはぐくむ」
(1) よりよく問題を解決する資質・体力
(2) 豊かな人生
(3) たくましく生きるための健康や体力

＜児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）＞

(1) 観点別学習状況の評価を基本とする
(2) 目標に準拠した評価を一層重視
(3) 個人内評価の工夫

研究主題
自ら学び，自ら考え，豊かな心を持った生徒の育成
－学習活動の質的改善と評価の一体化をめざして－

○自ら学び，自ら考え＝主体的な学習活動の展開
「知識注入，受信型」学習から「創造的探求，発信型」学習への転換
○豊かな心をもつ＝豊かな人間性
自ら律する心，他人とともに協調する心，他人を思いやる心，感動する心

学習活動の質的改善をめざす４つの柱
(1) 問題解決能力を育てる
(2) 情報活用の実践力を育てる
(3) コミュニケーション能力を育てる
(4) 「学び方」・「ものの考え方」を学ぶ

評価の改善・工夫
(1) 観点別学習状況の評価を基本とした評価
(2) 目標に準拠した評価（絶対評価）の重視
(3) 個人内評価の工夫

学習活動の多様化と評価の一本化

自ら考え，自ら学ぶ生徒
豊かな心を持った生徒

２．具体的な成果

(1) 評価規準表の作成を全教科・全学年において指導目標に沿って各単元の評価規準表を作成した。評価規準表を作成することにより，評価をいかにして行うか，それをどう生徒に還元していくかということを考えることができた。

(2) ５月は２年の理科でＴＴ，１年の英語でＴＴ，１０月は１年の数学でＴＴ，２年の理科でＴＴ，３年の英語で少人数，２月は１年の数学ＴＴと教科ごとに少人数授業やＴＴの研究授業を年３回行った。その中で，どの学習形態ではどんな指導法が適しているか実際に検証することができた。

(3) Ｔ・Ｔでの指導方法や学習形態・グループ分けについて研究を進め，英語科における少人数指導でのグループ分けには習熟度より等質のグループにする方が授業の能率がいいという意見が出た。数学科の基礎的な問題練習等では生徒選択による習熟度別指導も効果があることも検証できた。

(4) 教育機器を扱う際に，役割分担をすることで教育機器をより活用することが可能であった。

２．今後の課題

(1) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善をテーマにして，Ｔ･Ｔ，少人数の指導が生徒の学力を向上させる指導方法であると考え，さらに効果の上がるＴ･Ｔ，少人数授業の指導体制を工夫していく。

(2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善を研究のためだけに行うのではなく，その後の指導でも継続できるような指導計画・指導体制を考えていく。

(3) 来年度より２学期制が導入されるにあたり，今までより長いスパンでの評価をいかに行うか，その評価をどう生徒に還元していくかを今年度の成果をもとに考えていくことが必要である。

(4) 本校での研究成果をホームページ上で公開しようと計画しているが，他の方法も検討しなければならないと考えている。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

(1) 中間テスト，期末テストなどの定期テスト，県教委の学習状況調査等の結果から学力の定着の度合いを調べ，その後の指導に生かす。

(2) 来年度より２学期制になり，定期テスト間の期間が長くなるため，それだけでは学習内容の評価を生徒へ還元していくのが難しくなる。そのため、小テストを充実させ、その評価を生徒に還元し教師も参考資料としていく。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

研究成果普及のために研究受業の指導案や，アンケートの集計結果などを本校のホームページ内に掲載する予定である。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　■１６学級以上

【指導体制】　☒ 少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導
□ その他

【研究教科】　□ 国語　□ 社会　■数学　■ 理科
■ 外国語　□ 音楽　□美術　□ 技術・家庭
□ 保健体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■　有　□　無